

日本赤十字北海道看護大学看護学研究科
共同看護学専攻後期3年博士課程
博士論文要約

副看護師長同士の語りあいによるスタッフへの関わりの変化

- アクションリサーチを通して -

Changes in Relationships with Staff after Peer Dialogues
between Assistant Head Nurses: By Using Action Research

和田 由樹 Wada, Yuki

I. 序論

医療現場の疲弊が指摘されており「チーム医療」は重要なキーワードである。チーム医療の前提として、「チーム医療ができる病棟づくり」が求められており、その調整者は副看護師長である。組織に必要な人材であるにも関わらず、副看護師長を研究対象者とした研究はほとんどない。

II. 研究目的

副看護師長(看護師長直下の職位にある看護職員)が「語りあいの会」に参加することによって、スタッフへの関わりに関する認知や行動がどのように変化するかを明らかにすることである。

III. 研究方法

アクションリサーチの手法を用いた質的記述的研究である。アクションは、副看護師長同士による「語りあいの会」の開催である。研究参加者は「語りあいの会」、インタビューに参加した3名の副看護師長、インタビューにのみ参加したスタッフ8名、計11名であった。「語りあいの会」開催前、終了後、終了後3ヶ月に11名の研究参加者に対して、半構成的面接法によるインタビューを実施した。「語りあいの会」及び半構成的面接法によるインタビューの逐語録、参与観察記録等を分析データとした。得られたデータを分析、継続的なスーパーヴィジョン、不明な点は研究参加者に確認し妥当性を確保した。本研究は、日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会で承認(承認番号30-320)、共同看護学専攻研究倫理審査委員会で承認(承認番号19-03)された。

IV. 結果

「語りあいの会」は5回開催し、事例シートを用いて副看護師長が事例を提示、その事例をもとに研究参加者と研究者が自由に対話した。「語りあいの会」に参加した副看護師長は、それぞれにスタッフへの関わりに関する認知や行動に変化があった。インタビューにのみ参加した研究参加者からも副看護師長のスタッフに対する関わりの変化を認める語りがあった。

V. 考察

語るということは、副看護師長が自分の思い、考えを言葉にして他者に話し伝達的であると同時に、話しをしながら自分自身の主体性を取り戻すプロセス、自分自身にとってどのような意味を持つのか理解できるようにする行為であったと考える。そして副看護師長のスタッフに対する関わりの変化から期待できるものは、ロバート・カツが示した、「ヒューマンスキル」の向上を意味すると考える。このスキルはチーム医療として組織全体で協働関係を構築、維持するためには何ものにも代えられない重要なスキルである。これより副看護師長のスタッフへの関わりの変化は、円滑な部署運営、チーム医療の推進につながると考える。

VI. 結論

語りあいの会で自分の考えを言葉にして語り、その語りに対して問いや応答がなされることによって副看護師長に気づきがあり、スタッフへの関わりに関する認知や行動に変化がおきていた。副看護師長のスタッフへの関わりに変化があることで、円滑な部署運営、そしてチーム医療の推進がなされることが示唆された。